

二日物語

幸田露伴

青空文庫

此一日

其一

くわんけんせけんぜめつぽふ、
 観見世間是滅法、
 欲求無尽涅槃処、
 怨親已作平等心、
 世間不行慾等事、
 随
 あえさんりんきふじゆげ、
 依山林及樹下、
 或復塚間露地居、
 捨於一切諸有為、
 諦觀真如乞食活、
 南
 無阿弥陀仏、
 南無阿弥陀仏。
 實に往時はおろかなりけり。つく／＼静かに思惟すれば、
 のりきよ
 我憲清と呼ばれし頃は、
 力を文武の道に勞らし命を寵辱の岐に懸け、
 密かに自ら我をば
 たの
 負み、
 老病死苦の免さぬ身をもて貪瞋痴毒の業をつくり、
 私邸に起臥しては朝暮衣食の
 獄に繋がれ、
 禁庭に出入しては年月名利の坑に墜ち、
 小川の水の流るゝ如くに妄想の漣
 み
 波絶ゆる間なく、
 枯野の萱の燃ゆらむやうに煩惱の火
 自ら樂むに、
 有がたや三世諸仏
 のおぼしめしにも叶ひしか、
 凡念日に薄ぎて中懷淡きこと水を湛へたるに同じく、
 罪障
 刻に銷して
 両肩軽きこと風を担ふが如くになりしを覚ゆ。
 おもへば往事は皆非なり、
 今はた更に何をか求めん。
 奢を恣まにせば熊掌の炙りものも食ふに美味ならじ、
 足

るに任すれば鳥足の繕したるも纏ふに佳衣なり、ましてや蘿のからめる窓をも捨てて、月我を吊ひ、松たてる軒に来つては風我に戯る、ゆかしき方もある住居なり、南無仏南無仏、あはれよき庵、あはれよき松。

久に経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人も無き身ぞ

其二

真清水の世に出づべしともおもはねば見る眼寒げにすむ我を、慰め顔の一つ松よ。汝は三冬にも其色を変へねば我も一条に此心を移さず。なむぢ嵐に揺いでは翠光を机上の黄巻に飛ばせば、我また風に托して香烟を木末の幽花にたなびかす。そもく我と汝とは往時如何なる契りありけむ、かく相互に睦ぶこと是も他生の縁なるべし。草木国土悉皆成仏と聞くときは猶行末も頼みあるに、我は汝を友とせん。菩提樹神のむかしは知らねど、腕を組み言葉を交へずとも、松心あらば汝も我を友と見よ。僧青松の蔭に睡れば松老僧の頂を摩す、僧と松とは相応し。我は汝を捨つるなからん。

此所をまた我すみ憂くてうかれなば松はひとりにならんとすらん

あら、心も無く軒端のきばの松を寂さびしき庵の友として眺めしほどに、憶ひぞ出でし松山の、浪の景色はさもあらばあれ、世の潮しほなわ泡の跡方なく成りまし玉ひし新院の御事胸に浮び来りて、あらぬさまにならせられ仁和寺にんなじの北の院におはしましける時、ひそかに参りて畏くも御髪落させられたる御姿を、なくくおぼろげながらに拝みたてまつりし其夜の月のいと明く、影もかはらで空に澄みたる情無かりし風情さへ、今眼まのあたり前に見ゆるがごとし。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。實げに人界にんがい不定ふぢやうのならひ、是非も無き御事とは申せ、想ひ奉るまつもいとかしこし。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏阿弥陀仏。おもへば不思議や、長寛二年の秋八月廿四日は果敢なくも志渡しどにて崩かくれさせ玉ひし日と承はれば、月こそ異かはれ明日は恰も其日なり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。いで御陵みさぐきのありと聞く白峯といふに明日は着き、御墓おんしるしの草をものはらひ、心の及ばむほどの御手向けおんたむをもたてまつりて、いさゝか後世御安楽の御祈りをもつかまつるべきか。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

其三

頃は十月の末、ところは荒涼たる境なれば、見渡す限りの景色いとももの淋しく、冬枯れ野辺を吹きすさむ風蕭せうくと衣裾もすそにあたり、落葉は辿る径を埋めて踏む足ごとにかさこそと、小語さくやくごとき声を発する中を然ぜんとして歩む西行。衆しゅじやう聖ちゆう中そん尊せん、世間せけん之父しふ、一切いっさい衆しゅじやう生じやう、皆是かいぜし吾子ごし、深着しんぢやく世樂せらく、無有むう慧心ゑしん、などと譬喻品ひゆほんの偈げを口の中くちのちゆうにふつくと唱へく、従ふ影を友として漸やく山にさしかり、次第じだいくに分け登れば、力なき日はいつしか光り薄れて時雨空の雲の往来ゆきき定めなく、後こう山晴るゝ歟かと見れば前山忽ゆくてまちに曇り、嵐に駆かられ霧に遮さへられて、九折つづらなる岨そぼを伝ひ、過ぎ来し方さへ失ふ頃、前途ゆくての路もおぼつかなきまで黒みわたれる森に入るに、縦柏もみしはの大樹は枝を交はし葉を重ねて、杖持てる我が手首たなくびをも青むるばかり茂り合ひ、梢に懸れる松蘿さるをがせは《さんく》として静かに垂れ、雨降るとしは無けれども空翠凝つて葉末より滴る露の冷やかに、衣の袖も立ち迷へる水気に湿りて濡れたるごとし。音にきゝたる児ちごが岳たけとは今白雲に蝕まれ居る峨《がゞ》と聳えし彼峯あのならぬ、さては此あたりにこそ御墓みほしはあるべけれど、ひそかに心を

配る折しも、見るく千仞せんじんの谷底より霧漠と湧き上り、風に乱れて渦巻き立ち、崩る、
 雲と相応じて、忽ち大地に白布を引きはへたる如く立籠むれば、呼吸するさへに心ぐるし
 く、四方あたりを視るに霧の隔て、天地あめつちはたゞ白きのみ、我が足すらも定かに見えず。何と思
 ひも分け得ざる間に、雲霧自然おのづと消え行けば、岩角の苔、樹の姿、ありしに變らで眼まなこに遮
 るものもなく、たゞ冬の日の暮れやすく彼方の峯に既没はやいりて、梟の羽はばたき翥し初め、空や、
 暗くなりしばかりなり。木立わづかに間ひまある方の明るさをたよりにて、御陵みさき尋ねまゐらす
 心のせわしく、荆棘いばらを厭はでかつ進むに、そもくこれをば、清涼せいりやう紫宸うしじんの玉台に四海
 の君とかしづかれおはしませし我國の帝の御墓ごぼぞとは、かりそめにも申得たてまつらるべ
 きや、わづかに土を盛り上げたるが上に龕末そまつなる石を三重に畳みなしたるあり。それさへ
 狐兔ことこの踰ゆるに任せ草菜さうらいの埋むるに任せたる事、勿体なしとも悲しとも、申すも畏し憚
 りありと、心も忽ち掻き暗まされて、夢とも現うつとも此処を何処とも今を何時とも分きがた
 くなり、御墓の前に平伏ひれふして円顛えんぜんを地に埋め、声も得立てず咽むせび入りぬ。

其四

實にも頼まれぬ世の果敢なき、時運は禁臍をも犯し宿業は玉体にも添ひたてまつるこ
 と、まことに免れぬ道理とは申せ、九重の雲深く金殿玉楼の中にかしづかれおはしませ
 し御身の、一坏の土あさましく頑石叢棘の下に神隠れさせ玉ひて、飛鳥音を遺し
 麋鹿痕を印する他には誰一人問ひまゐらすものもなき、かゝる辺土の山間に物さびし
 く眠らせらるゝ御いたはしき。ありし往時、玉の御座に大政おごそかにきこしめさ
 せ玉ひし頃は、三公九卿首を俛れ百官諸司袂をつらねて恐れかしこみ、弓箭の武夫伎
 能の士、あらそつて君がため心を傾ぶけ操を励まし、幸に慈愍の御まなじりにもかゝり聊
 か勸賞の御言葉にもあづからむには、火をも踏み水にも没り、生命を塵芥よりも軽く捨
 てむと競ひあへりしも、今かくなり玉ひては皆対岸の人異舟の客となりて、半巻の経を誦
 し一句の偈をすゝめたてまつる者だになし。世情は常に眼前に着して走り天理は多く背後
 に見はれ来るものなれば、千鐘の祿も仙化の後には匹夫の情をだに致さする能はず、狗馬
 たちまちに恩を忘るゝとも固より憎むに足らず、三春の花も凋落の夕には芬芳の香り早
 く失せて、たる大日輪は螻蟻の穴にも光を惜まず、美女の面にも熱を減ぜず、茫たる
 大劫運は茅茨の屋よりも笑声を奪はず、天子眼中にも紅涙を餽る、尽大地の苦、尽大
 地の楽、没際涯の劫風滾 《こんく》たり、何とりいでゝ歎き啣たむ。さはさりな

がら現土には無上の尊き御身をもて、よしなき事をおぼした、れし一念の御迷ひより、幾
 干くその罪業を作り玉ひし上、浪煙る海原越えて浜千鳥あとは都へ通へども、身は松山に音を
 のみぞなく、孤灯に夜雨を聴き寒かんきん、衾旧時を夢みつ、遂に空くなり玉ひし御事、あま
 りと申せば御傷おんいたはしく、後の世のほども推し奉るにいと恐ろし。いざや終よもすがら夜供養
 したてまつらむと、御墓みしるしより少し引きさがりたるところの平めなる石の上に端然たんねんと坐を
 しめて、いと静かにぞ誦しいだす。妙法蓮華經提婆達多品 第十二。爾時仏告諸菩薩
 及天人四衆、吾於過去無量劫中、求法華經無有懈倦、於多劫中常作國王、発
 願求於無上菩提、心不退転、為欲満足六波羅密、勤行布施、心無悋惜、象
 馬七珍国城妻子奴婢僕従、頭目身肉手足不惜軀命、……

日は全く没りしほどに山深き夜のさま常ならず、天かくすまで茂れる森の間に微なる風
 の渡ればや、樹端こすゑの小枝音もせず動きて、黒きが中に見え隠れする星の折ふしきらりと
 鋭き光りを落すのみにて、月はいまだ出でず。ふけ行くまゝに霜冴えて石床せきしやういよゝ
 冷やかに、万籟ばんらい死して落葉さへ動かねば、自然おのづと神清み魂たましひ魄も氷るが如き心地して何
 とはなしに物凄まじく、尚御経を細と誦しつゞくるに、声はあやなき闇に迷ひて消ゆる
 が如く存あるが如く、空にかくれてまたふたゝび空より幽に出で来るごときを、吾が声とも

他の声ともおぼつかなく聴きつゝ、濁劫悪世中、多有諸恐怖、悪鬼入其身、罵
りきじよくが詈毀辱我、と今しも勸持品の偈げを称ふる時、夢にもあらず我が声の響きにもあらず、正
 しく円位 と呼ぶ声あり。

其五

西行かすかに眼まなこを転じて、声する方の闇うみを覗のぞへば、ぬば玉の黒きが中を朽木のやうなる
 光り有てる霧とも雲とも分かざるものの灰白く立ちまよへる上に、其様さま異なる人の丈いと
 高く瘦せ衰へて凄まじく骨立ちたるが、此方に向ひて蕭然せうぜんと佇たぐめり。素より生死の際に
 工夫修行をつみたる僧なれば恐ろしとも見ず、円位と呼ばれしは抑何人にておはすや、と
 尋ぬれば、嬉しくも詣で来つるものよ、我を誰とは尋ねずもあれ、末葉吹く嵐の風のはげ
 しさに園生の竹の露つゆこぼれける露の身ぞ、よく訪とひつるよ、と聞え玉ふ。あら情無や勿体
 なしや、さては院の御霊みたまの猶此土どをば捨てさせ玉はで、妄執の闇うみに漂泊さすらひあくがれ、こゝ
 にあらはれ玉ひし歟、あら悲しや、と地に伏して西行涙をとゞめあへず。
 さりとてはいかに迷はせ玉ふや、濁穢ちよくゑの世をば厭いとひ捨て玉ひつることの尊くも有難く

おぼえて、いさゝか随縁ずゐえんほふせ法施ほふせしたてまつりしに、六慾の巷にふたゝび現げんぎやう形ぎやうし玉ふは、
 いとかしこくも口惜き御心に侍り、仮現けげんの此界さかひにてこそ聖慮安らけからぬ節もおはしつれ、
 不堅如聚沫ふけんによじゆまつの御身を地水火風にかへし玉ひつる上は、旋転せんでんによしやりん如車輪じゆりんの御心にも和合動
 転を貪り玉はで、隔生かくしやうそくまう即忘ふんちんそくじやう、焚塵ふんちんそくじやう即淨じやう、無垢の本土に返らせ玉はむこそ願はまほ
 しけれ、頓やがては迂僧も肉壞骨散にくゑこつさんの暁を期し、弘誓くぜいの仏願を頼りて彼岸にわたりつき、楽
 しく御傍に参りつかふまつるべし、迷はせ玉ふな迷はせ玉ふな、唯何事も夢まぼろし、世
 に時めきて榮ゆるも虚空に躍る水珠の、日光により七彩を暫く放つに異ならず、身を狭め
 られ悶ゆるも闇夜を辿る稚児をさなごの、樹影を認めて百鬼来たりと急に叫ぶが如くなれば、得
 意も非なり失意も非なり、歡ぶさへも空あだなれば如何で何事の実まこと在ならんとぞ承はりおよぶ、
 無有むゝをんしんさう冤親想えいだつしよあくしゆ、永脱じやうしやうつてきえつしん諸悪趣しよあくしゆ、所詮は御心を刹那にひるがへして、常生じやうしやうつてきえつしん適悦じやくえつ心、
 受樂じゆらくむきゆうきよく無窮むきゆうきよく極ごく、法味を永遠に樂ませ玉へ、と思入つて諫めたてまつれば、院の御靈は
 雲間に響く御声してからくと異様ことやうに笑はせ玉ひ、おろかや解脱の法を説くとも、仏も
 今は朕わが敵あだなり、涅槃ねはんも無漏むろも肯うけがはじ、往時むかしは人朕ひとわが光明ひかりを奪わひて、朕われを泥犁ないりの闇に陥し
 ぬ、今は朕人を涙に沈ましめて、朕わが冷笑あざわらひの一声の響の下に葬らんとす、おもひ観よ
 汝、漸く見ゆる世の乱は誰が為すこととぞ汝はおもふ、沢の螢は天に舞ひ、闇裏やみの念おもひは世

に燃ゆるぞよ、朕は闇に動きて闇に行ひ、闇に笑つて闇に憩ふ下津岩根の常闇の国の大
王なり、正法の水有らん限は魔道の波もいつか絶ゆべき、仏に五百の弟子あらば朕
にも六天八部の属あり、三世の諸仏菩薩の輩、何の力か世にあるべき、たゞ徒に人の舌よ
り人の耳へと飛び移り、またいたづらに耳より舌へと現はれ出で、遊行するのみ、朕が眷
属の闇きより闇きに伝ひ行く悪鬼は、人の肺腑に潜み入り、人の心肝骨髓に咬ひ入つ
て絶えず血にぞ飽く、視よ見よ魔界の通力もて毒火を彼が胸に煽り、紅炎を此が眼より迸
らせ、弱きには怨恨を抱かしめ強きには瞋りを発さしめ、やがて東に西に黒雲狂ひ立つ世
とならしめて、北に南に真鉄の光の煌めき交ふ時を来し、憎しとおもふ人に朕が辛かり
しほどを見するまで、朝家に酷く祟をなして天が下をば掻き乱さむ、と御勢ひ凜しく誥
げたまふにぞ、西行あまりの御あさましさに、滝と流るゝ熱き涙をきつと抑へて、恐る惶
るいさゝか首を擡げゝる。

其六

こは口惜くも正なきことを承はるものかな、御言葉もどかんは恐れ多けれど、方外の身

なれば憚り無く申し聞えんも聊か罪浅う思し召されつべくやと、遮つて存じ寄りのほどを
 言しまを試み申すべし、御憤はまことにさる事ながら、若人いか瞋り打たずんば何を以てか忍辱
 を修めんとも承はり伝へぬ、畏れながら、ながらへて終に住むべき都も無ければ憂き折節
 に遇ひたまひたるを、世中よのなかそむかせたまふ御便宜おんたよりとして、いよく法海の深みへ深
 河の浅きに騒ぐ御心を注がせたまひ、彼岸の遠きへ此土の汀去りかぬる御迷を船出せさ
 せ玉ひて、玉をつらぬる樹の下に花降り敷かむ時に逢はむを待ちおはず由承はりし頃は、
 寂然じやくねん としなり、俊成しゅんじやうなども御志の有り難さを申し交して如何ばかりか欣ばしく存じまゐら
 せしに、御納経なふきやうの御望み叶はせられざりしより、竹の梢に中つて流るゝ金弾の如くに
 御志あらぬ方へと走り玉ひ、鳴門の潮の逆風さかかぜに怒つて天に滔るやう凄じき御祈願立てさ
 せ玉ひしと仄に伝へ承はり侍りしが、冀ねがはくは其事の虚妄いつはりにてあれかしと日比念じまゐら
 せし甲斐も無う、さては真に猶此袈裟しやばかい婆界に妄執をとゞめ、彼兜卒かのとそつてん天に浄樂は得ず御坐
 ますや、訝いぶかしくも御意みこころの然さばかり何に留まるらん、月すめば谷にぞ雲は沈むめる、嶺吹
 き払ふ風に敷かれてたゞ御頭の転じたまふを限に弾指たんし転の相は、まことは戲論げろんの名目
 のみ、真如の法海より一瓢の量を分ち取りて、我執の寒風に吹き結ばせし氷を我ぞと着す
 れば、熱湯は即仇たるべく、実相の金山こんざん山より半畚はんぼん畚の資を齎し来りて、愛慾の毒火に鑄い

成せし鼠を己なりと思はんには、猫像或は敵たるべけれど、本来氷も湯も隔なき水、鼠も猫も異ならぬ金なる時んば、仮相の互に亡び妄現の共に滅するをも待たずして、当体即空、当事即了、廓然として、天に際涯無く、峯の木枯、海の音、川遠白く山青し、何をか瞋り何にか迷はせたまふ、疾く、疾く、曲路の邪業を捨て正道の真心を発し玉へ、と我知らず地を撃つて諫め奉れば、院の御亡霊は、山壑もたぢろき木石も震ふまでに凄くも打笑はせ玉ひて、おろかなり円位、仏が好ましきものにもあらばこそ、魔か厭はしきものにもあらばこそ、安樂も望むに足らず、苦患も避くるに足らず、何を憚りてか自ら意を抑へ情を屈めん、妄執と笑はば笑へ、妄執を生命として朕は活き、煩惱と云はば云へ、煩惱を筋骨として朕は立つ、おろかや汝、四弘誓願は菩薩の妄執、五時説教は仏陀の煩惱、法蔵が妄執四十八願、観音が煩惱三十三身、三世十方恒河沙数の諸仏菩薩に妄執煩惱無きものやある、妄執煩惱無きものやある、何ぞ瞿曇が舌長なる四十余年の託言繰言、我尊しの冗語漫語、我をば瞞き果すに足らんや、恨みは恨み、讐は讐、復さでは我あるべきか、今は一切世間の法、まつた一切世間の相、森羅万象人畜草木、悉皆朕の敵なれば打壊さでは已むまじきぞ、心に染まぬ大千世界、見よく、火前の片羽となり風裏の纖塵と為して呉れむ、仏に六種の神通あれば朕に千般の業通あり、あ

りとあらゆる有情うじやうがんしき含識皆朕が魔界に引き入れて朕が眷属となし果つべし、汝が述べたるところの如きは円顛の愚物が常套の談、醜し、醜し、將もち歸り去れ、山に映りあひ、天地忽ち紅くれなゐ色になるかと見る間に失せ玉ひぬ。

西行はつと我に復りて、思へば夢か、夢にはあらず。おのれは猶かつ提だいばほん婆品を繰りかへしく読み居たるか、其読続き我が口頭に今も途絶えず上り来れり。

(明治二十五年五月「国会」)

彼一日

其一

頼み難きは我が心なり、事あれば忽に移り、事無きもまた動かんとす。生じ易きは魔の縁ゆかりなり、念おもほしいまを放おこにすれば直に発おこり、念を正しうするも猶起らんとす。此故に心は大海の浪と揺ゆらぎて定まる時無く、縁は荒野の草と萌えて尽くる期ごあらねば、たましく大勇猛の意気を鼓して不退転の果報を得んとするものも、今日の縁にひかれて旧年の心を失ふ輩は、可あ

惜舟たうを出して彼岸に到り得ず、憂くも道に迷ひて穢土えいどに復還るに至る。されば心を収むるは靈地に身を　の靈地に運びて寺　の御仏をも拝み奉り、勝しょう縁えんを結びて魔縁を斥け、仏事に勤めて俗事に遠ざからんかた賢かるべしとて、そこに一日、かしこに二日と、此御仏彼御仏の別ちも無くそれ／＼の御堂を拝み巡りては、或は祈願を籠めて参籠の誠を致し、或は和歌を奉りて讚歎の意を表し来りけるが、仏天の御思召にも協ひけん聊か冥加も有りとおぼしく、幸に道心のほかの他あだしごころ心も起さず勝縁を妨ぐる魔縁にも遇はで、終に今日に及ぶを得たり。既往の誠に欣ぶべきに将来の猶頼まゝほしく、長谷の御寺の觀世音菩薩の御前に今宵は心ゆくほど法施ほふせをも奉らんと立出でたるが、夜　に霜は募りて樹　に紅は増す神無月かんなつきの空のやゝ寒く、夕日力無く春うすつきて、晚おくれし百舌の声のみ残る、暮方のあはれさの身に浸むことかな。見れば路の辺の草のいろ／＼、其とも分かず皆いづれも同じやうに枯れ果てゝ崩折くつほれ偃ふせり。珍らしからぬ冬のさま、取り出でゝ云ふべくはあらねども、折からの我が懐おもひに合ふところあり。情こころを結び詞ことばを束ねて、歌とも成らば成して見ん、おゝそれよ、さま／＼に花咲きたりと見し野辺のおなじ色にも霜がれにけり。嗚呼我人とも終には如是かく、男女美醜わかちの別も無く同じ色にと霜枯れんに、何の翡翠の髪さの状さま、花の笑ひかんばせの顔か有らん。まして夢を彩る五欲の歡たのしみ樂、幻を織る四季の遊あそび娛、いづれか虚いつはり妄な

らざらん。たゞ勤むべきは菩提の道、南無仏、南無仏、と観じ捨て、西行独り路を急ぎぬ。

其二

弓張月の漸う光りて、入相いりあひの鐘の音も収まる頃、西行は長谷寺はせでらに着きけるが、問ひ驚かすべき法の友のりの無きにはあらねど問ひも寄らで、観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹を颯なぶりて夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉などの空に狂ひて吹き入れられつ、法衣ころもの袖にかゝるもあはれに、又仏前の御灯明みあかしの目瞬めはじきしつゝ万般よろづのもの黒み渡れるが中に、いと幽なる光を放つも趣きあり。法華經ほんの品第二十五を声低う誦するに、何となく平時つねよりは心も締まりて身に浸みわたる思ひの為れば、猶誠を籠めて誦し行くに天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ、処といひ相応して、我耳に入るは我声ながら、若くは随喜仏法の鬼神などの、声を和あはせて共に誦する歟かと疑はるゝまで、上無く殊勝しよきに聞こえわたりぬ。特に参りたる甲斐ことはありけり、菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作しよきをば善哉よしとして必ず納受なふじゆし玉ふなるべし、今宵の心の澄み切りたる此すの清しさを

何に比へん、あまりに有り難くも尊く覚ゆれば、今宵は夜すがら此御堂の片隅になり跣坐ふざなして、あかつき暁天がたに猶一度誦経しまゐらせて、扱其後香華をも浄水をも供じて罷らめど、西行やがて三拝して御仏の御前を少し退りすき、影暗き一隅に身を振ち据ゑ、凍れる水か枯れし木の、動きもせねば音も立てず、じやくねん寂然として坐し居たり。

夜は沈と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御灯明は一つ消え、また一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊灯籠の、光り朦朧として力無きが、夢の如くに残れるのみ。此寺こゝの僧どもは寒氣さむさに怯おそちて所化寮しよけらうに炬たきをや囲みてあるらん、影だに終に見するもの無し。云ふべきかたも無く静なれば、日ひ比ひ焼やきたる余氣なるべし今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自然おのづからとして霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや頭かしらには何やらん打被うちかぎたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、何としも無く猶見であるに、やがて月の及ばぬ闇の方に身を入れたれば定かには知れぬながら、此御堂に打向ひひて一度は先まづ拝み奉り、さて静と上り来りぬ。御堂は狭からぬに灯ひは螢ひほどなり、灯の高さは高し、互の程は隔たりたり、此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方は能くも見得ねば、西行は只我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。

彼方は固より闇の中に人あることを知らざれば、何に心を置くべくも無く、御仏の前に
 進み出でつ、最謹ましげに危坐りて、あまたゝびがつしやうらいはい 数度合掌礼拝なし、一心の誠を致すと見
 ゆ。同じ菩提の道の友なり、其心操こころばへの浅間ならぬも夜深の参詣に測り得たり。衣の色
 さへ弁わかち得ざれば面は況して見るべくも無けれど、浄土の同行の人なるものを、呼びかけ
 て語らばや、名も問はばやと西行は胸に思ひけるが、卒爾ものいに言はんは悪あしかるべし、祈願の
 終つて後にこそと心を控へて伺ふに、彼方は珠数を取り出して、さや／＼とばかり擦り初そ
 めたり。針の落つる音も聞くべきまで物静かなる夜の御堂の真中に在りて、すゐしやう 水精の珠
 数を擦る音の亮さやかなる響きいと冴えて神し。御経は心に誦するとおぼしく、ばんらい 万籟絶え
 たるに珠の音のみをたゞ緩やかに緩やかに響かす。其声或は明らかに或は幽に、或は高く
 或は低く、寤覚の枕の半は夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面おもに 中に方法あり、
かじよじつさうふぶさうゐはい 皆与実相不相違背と、いとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つて在りけるが、期
 したるほどの事は仕果て、や其人数珠を収めて御仏をば礼拝することあまたゝび 数度しつ、やを
 ら身を起して退まからんとす。菩提の善友、浄土の同行、契を此土に結ばんには今こそ言葉を
 かくべけれど、思ひ入て擦る数珠ずの音の声すみておぼえずたまる我涙かな、と歌の調は好
 かれ悪かれ、西行急いはかに読みかくれば、彼方は初めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、

何と仰られしぞ、今一度と、心を圧鎮めて問ひ返す。聞き兼ねけんと思ひ入りて擦る数珠の音の声澄みて、と復び言へば後は言はせず、君にて御坐せしよ、こはいかに、と涙に顫ふおろく声、言葉の文もしどろもどろに、身を投げ伏して取りつきたるは、声音に紛ふかたも無き其昔偕老同穴の契り深かりし我が妻なり。厭いて別れし仲ならず、子まで生したる語らひなれば、流石男も心動くに、況して女は胸逼りて、語らんとするに言葉を知らず、巖に依りたる幽蘭の媚かねども離れ難く、たゞ露けくぞ見えたりける。

西行きつと心を張り、徐に女の手を払ひて、御仏の御前に乱がはしや、これは世を捨てたる瘦法師なり、捉へて何をか歎き玉ふ、心を安らかにして語り玉へ、昔は昔、今は今、繰言な露宣ひそ、何事も御仏を頼み玉へ、心留むべき世も侍らず、と諭せば女は涙にて、さては猶我を世に立交らひて月日経るものと思したまふや、灯火暗うはあれどおほよそは姿形をも猜し玉へ、君の保延に家を出で、道に入り玉ひしより、宵の鐘曉の鳥も聞くに悲く、春の花秋の月も眺むるに懶くて、片親無き児の智慧敏きを見るにつけ胸を痛め心を傷ましめしが、所詮は甲斐無き嗟歎せんより今生は擱き後世をこそ助からめと、娘を九条の叔母に頼みて君の御跡を追ひまゐらせ、同じ御仏の道に入り、高野の麓の天野といふに日比行ひ居り侍るなり、扱も君を放ち遣りまゐらせて御心のまゝに家を出づるを得さしめ奉

りし^{そのかみ}往時より、我が子を人に預けて世を捨てたる今に至るまで、いづれか世の常としては
 悲しきことの限りならざらん、別れまゐらせし歳は我が齡、僅に^{はたち}二十歳を越えつるのみ、
 また^{いとけなき}幼児を離せしときは其が^{そむつつ}六歳と申す愛度無き折なり、老いて夫を先立つるにも泣
 きて泣き足る例は^{ためし}聞かず、物言はぬ^{みつこ}嬰兒を失ひても心狂ふは母の情、それを行末長き齡に、
 君とは故も無くて別れまゐらせ、可愛き盛りに^{をさなき}幼児を見棄てつる悲しさは如何ばかりと覺
 す、されど斯ばかりの悲しさをも、女の胸に堪へ堪へて鬼女蛇神のやうに過ぎ来つるは、
 我が悲みを悲とせで偏に君が^{よろこび}歡喜を我が歡喜とすればなるを、別れまゐらせしより十余
 年の今になりて繰言も云ふものやう思はれまゐらせたる拙き情無き、君は我がための知
 識となり玉ひぬれば、恨み侍らざるばかりか却て悦びこそ仕奉れ、彼世にてもあれ君に遇
 ひまゐらせなば君の家を出で玉ひし後の我が上をも語りまゐらせて、能くぞ浮世を思ひ切
 りぬるとの御言葉をも得んとこそ日比は思ひ設け居たれ、別れたてまつりし時は今生に御
 言葉を玉はらんことも復有るまじと思ひたりしに、夢路にも似たる今宵の逢瀬、^{いくとせ}幾年の
 心あつかひも聊か^{ほい}本意ある心地して嬉しくこそ、と細 《こま〜》と述べ。折から灯籠
 の中の^ひ灯の、香油は今や尽きに尽きて、やがて熄^きゆべき一明り、ぱつと光を発すれば、臙
 気ながら互に見る^{いろ}雑彩無き^{ぶつえ}仏衣に^つ裏まれて^{せうぜん}蕭然として坐せる姿、修行に^{やつ}寔れ老いたる面

ざし、有りし花やかさは影も無し。

これが往時むかしの、妻か、夫か、心根可愛や、懐かしやと、我を忘れて近寄る時、忽然たちまちふつと灯は滅して一念未生みしやうの元の闇に還れば、西行坐を正うして、能くこそ思ひ切り玉ひたれ、入道の縁は無量にして順逆じゆんぎやく正しやう傍ぼうのいろくあれど、たゞ往生を遂ぐるを尊ぶ、往時むかしは世間の契を籠め今は出世間の交りを結ぶ、御身は我がための菩提の善友、浄土の同行なり悦ばしや、たゞし然さまでに浮世をば思ひ切りたる身としては、懐旧の情はさることながら余りに涙の遣る瀬無くて、我を恨むかとも見えし故、先刻さきのやうには云ひつるなり、既に世の塵に立交らで法の門かどに足踏しぬる上は、然ばかり心を悩ますべき事まことも実は無き筈ならずや、と最物いと優しく尋ね問ふ。

慰められては又更に涙脆きも女の習ひ、御疑ひ誠に其理由ゆゑあり、もとより御恨めしう思ひまゐらす節もなし、御懐しうは覚え侍れど、それに然さばかりは泣くべくも無し、御声を聞きまゐらすと斉しく、胸に湛へに湛へし涙の一時に迸り出でしがため御疑を得たりしなり、其所以いはれは他ならぬ娘の上、深く御仏の教に達して宿命しゆくみやう業報を知るほどならば、是こも亦煩ひとするに足らずと悟りてもあるべけれど然は成らで、ほとく頭の髪この燃え胸の血の凍るやうに明暮悩むを、君は心強くましますとも何と聞き玉ふらん、聞き玉へ、娘

は九条の叔母が許もとに、養ひ娘といふことにて叔母の望むまゝに与へしが、叔母には真まことの娘もあり、母の口よりは如何なれど年齢こそ互に同じほどなれ、眉目容姿みめかたちより手書き文読む事に至るまで、甚いたく我が娘は叔母の娘に勝りたれば、叔母も日頃は養ひ娘の賢いとき可愛いとさと、生うみの女の自然すめおのづからなる可愛いとさに孰いとれ優り劣り無く育てけるが、今年は二人ともに十六になりぬ、髪かみの艶、肌はだかの光り、人の、纔さうに一人の子を持ちて人となるまで育てもせず、児童こどもの間の遊あそびにも片親無なきは肩窄すぼまる其の憂うれき思しを四歳よっより為なせ、六歳むつといふには継ましき親おやの頭に戴かぶく悲かなみを為なせ、雲うみの蒸もす夏なつ、雪ゆきの散ちる冬ふゆ、暑あつさも寒ふさも問とひ尋たねず、山やまに花はなある春はるの曙あけぼの、月に興おこある秋あきの夜よも、世よにある人ひとの姫等たちの笑わらみ樂たのしむには似にもつかず、味あじ気き無なう日ひを送おくらせぬる其そのさへ既に情なさけ無く親おや甲斐かひの無なきことなれば、同じおなじほどなる年頃としごろの他家よその姫ひめならんどを見るにつつけ、嗚呼ああ我が子こはと思おもひ出でで、木きの片かた、竹たけの端はたくれと成なり極たぎめたる尼にの身みの我が身みの上うへは露つゆ思しはねど、かゝる父ちちを持ち母ははを持ちたる吾われが子この果報はつぱうの拙あはさを可哀あはれと思おもはぬことも無し、況いはして此頃このときの噂うわさを聞き又余所あまながら視みもすれば、心こころに春はるの風かぜ渡わたりて若わか木きの花はなの笑わらまんとする恋こひの山路やまぢに悩なやめる娘むすめの、女むすめの身みには生命いのちなる生なまくる死しぬるの岐まれにも差さし掛かりたる態かたちなる上うへ、生なまみの子この愛あいに迷まよひ入りたる頑かたく凶にくの老婆ばばに責とがめられて朝夕あすけを經たる胸むねの中なか、父ちち上御坐おほはさば母はは在あらばと、親おやを慕こひて血ちを絞しぼる涙なみだに暮くるゝ時ときもある体てい、親おやの

心の迷はずてやは、打捨て置かば女は必ず彼方此方の悲さに身を淵河にも沈めやせん、然無くも逼る憂さ辛さに終には病みて倒れやせん、御仏の道に入りたれば名の上の縁は絶えたれど、血の聯つらなり続は絶えぬ間、親なり、子なり、脈絡は牽ひく、忘るゝ暇もあらばこそ、昼は心を澄まして御仏に事つかへまつれど、夜の夢は女のことならぬ折も無し、若し其儘に擱さしおいて哀しき終を余所　しく見ねばならずと定まらば、仏に仕ふる自分みづからは禽にも獸にも慚しや、たとへば来ん世には金の光を身より放つとも嬉しからじ、思へば御仏に事ふるは本は身を助からんの心のみにて、子にも妻にもいと酷き鬼のやうなることなりけり、爽いさぎ快よきには似たれども自己おのれ一人を蓮葉はちすばの清きに置かん其為に、人の憂きめに眼も遣らず人の辛きに耳も仮さず、世を捨てたればと一口に、此世の人のさま／＼を、何ともならばなれがしに斥け捨つるは卑しきやうなり、何とて尼にはなりたりけん、如何にもして女と共に経るべかりしに、鈍おそくも自ら過ちけるよ、今は後世ごせ安楽も左のみ望まじ、火　と慕ひ寄りつゝ、継りまゐらせたるを御心強くも、椽より下へと荒らかに　《こま／＼》と語れば西行も数あまた／＼度眼を押しぬぐひしが、声を和らげていと静に、云ひたまふところ皆其理あり、たゞし女の上の事は未だ知らずに御在おはすと見えたり、此の五日ほど前の事なり、我みづから女を説き諭して、既に火宅くわたくの門を出で、法苑の内にいらしめ終んぬ、聊か聞くと

ころありしかば、眼前の　に祈りて酬ひまゐらせん、又情ある人のたゞ一人侍りしが、何
 と申し交したることも無ければ別れくになるとも怪しうはあらず、雲は旧もとに依つて白く
 山は旧に依つて青からんのみなり、全く世をば思ひ切り侍りぬ、とく導師となりて剃度せ
 しめ玉へと、雄　しくも云ひ出でたれば、其心根の麗せきに愛で、我また雄　しくも丈
 なる烏羽玉うばたまの髪を落して色ある衣きぬを脱ぎ棄てさせ、四弘誓願しぐせいぐわんを唱へしめぬ、や、何と仕
 玉へる、泣き玉ふか、涙を流し玉ふか、無理ならず、菩提の善友よ、泣き玉ふ歟、嬉しさ
 にこそ泣き玉ふならめ、浄土の同行よ、落涙あるか、定めし感涙にこそ御坐すならめ、お、
 余りの有難さに自分おのれもまた涙聊か誘はれぬ、さて美しき姫は亡せ果てたり、美しき尼君は
 生なり出で玉ひぬ、青　としたる寒げの頭かしら、鼠色ねずみの法衣ころも、小き数珠ずだ、殊勝なること申すばか
 り無し、高野の別所に在る由の菩提の友を訪とぶらはんとて飄然として立出で玉ひぬ、其後の事
 は知るよし無し、燕せはの忙しく飛ぶ、兔うさぎの自ら剥ぐ、親は皆自ら苦む習なれば子を思はざる
 人のあらんや、但し欲樂の満足を与へ榮華の十分を享けしむるは、木葉このはを与へて児の啼き
 を賺すかす其にも増して愚のことなり、世を捨つる人がまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨
 つるなりけれ、たゞ幾重にも御仏を頼み玉へ、心留むべき世も侍らず、南無仏　、と
 云ひ切りて口を結びて復言はず。月はやがて没いるべく西に廻りて、御堂に射し入る其光り

水かとはかり冷かに、端然として合掌せる二人の姿を浮ぶが如くに御堂の闇の中に照し出しぬ。

(明治三十四年一月「文芸倶楽部」)

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集 6 幸田露伴集」講談社

1963（昭和38）年1月19日初版第1刷

1980（昭和55）年5月26日増補改訂版第1刷

初出：「國會」

1892（明治25）年5月

「文藝俱樂部」

1901（明治34）年1月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字、旧仮名にあらためました。

※「御陵《みさゝぎ》」と「御陵《みさゝき》」の混在は底本通りにしました。

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二日物語

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>